郷土史への扉

世界ジオパークと隼人の乱

『広報きりしま』平成二十一年一月号は、トップに見開きで「日本の霧島から世界の霧島へ」という見出しを大きく載せていました。記事の内容は、二〇一〇年世界ジオパークに霧島山を登録してもらうため霧島ジオパーク推進連絡協議会が活動を始めたことを紹介したものです。記事の解説によれば、「ジオパークとは、自然遺産（貴重な地形や地質とそこに見られる動植物など）を含む自然公園のこと」だそうです。

霧島ジオパーク推進の役割を担うのは「環霧島会議」に加わっている鹿児島、宮崎両県の五市二町、霧島市・曽於市・湧水町・えびの市・小林市・高原町・都城市です。この「環霧島」の言葉を聞いたとき、奈良時代のある事件を思い出しました。それは今を去る約千三百年前の養老四（七二〇）年に起こった隼人の乱のことです。大和朝廷は大伴旅人を征隼人大将軍に任命し、笠朝臣御室・巨勢朝臣真人を副将軍にして、隼人の鎮圧のため一万人ほどの軍隊を大隅の国に送りました。

『続日本紀』という『日本書紀』の後に出された史書には、隼人の乱の出来事を「隼人反して、大隅国守、陽侯史麻呂を殺す」と書いてあるだけです。これだけでは反乱を起こし朝廷軍と戦ったのは、どこの土地の隼人かよく分かりませんが、大分県の宇佐神宮に伝わる『八幡宇佐宮御託宣集』には、「養老四年庚申、大隅日向両国の隼人等、日本の地を傾けんと擬るの間」とあります。これによると「隼人の乱」に日向の隼人も加わったことが分かります。

そこで考えたのは、この「隼人の乱」の首謀者は誰なのかということです。史書には首謀者の名前などどこにも見当たりません。しかしながら、地元の有力者として可能性のあるのが、大隅国ができる前後に名前が出てくる「曽君」です。

元明天皇の和銅三（七一〇）年一月「日向ノ隼人、曽君細麻呂、荒俗ヲ教喩セシメ、聖化ニ馴レ服ワシム。詔シテ、外従五位下ヲ授ク」（『続日本紀』）と見えます。『日本書紀』には、ニニギノ尊が「日向の襲の高千穂の峯に天降ります」と書かれています。この曽（襲）の高千穂、つまり曽の山を中心とした一帯に勢力を持っていたのが、大隅隼人、曽君であったと思われます。

「日向の隼人」とあるのは、この時点では、まだ大隅国が設置されていないためです。和銅六（七一三）年四月「日向ノ国ノ肝坏・贈於・大隅・姶羅ノ四郡ヲ割イテ、始メテ大隅国ヲ置ク」『続日本紀』とありますから、元々は鹿児島県も「日向の国」だったのです。

曽君は「従五位外」という高い位からして郡司だと思います。元々「君」は朝廷から地方の有力者に与えられた官職ですから。大隅国ができてから七年後に起こった隼人の乱では、曽君細麻呂はどのような行動をとったかよく分かりません。ところがそれより二十年後、聖武天皇の御世、天平十二（七四〇）年に太宰府の役人であった藤原広嗣が北九州で起こした反乱では、反乱軍に加担した隼人「贈唹君多理志佐」が出てきます。これは曽君一族が朝廷に服従していなかった証拠です。

さて『御託宣集』にある日向国の隼人とは、いったいどの辺りの隼人でしょうか。霧島ジオパーク推進連絡協議会のメンバーの市町を見たとき、これはと思い当たりました。宮崎県側の市町は、諸県郡に入っています。『日本書記』に応神天皇の御世、「日向の国に「髪長媛」という美しい娘がおり、天皇が召し出した。娘は諸県君牛諸井の娘である」と書いています。諸県郡の地に、かつて「諸県君」を名乗る有力者が居たことを物語る話です。

大隅国内の反乱に、遠く離れた所からわざわざ参加するはずもないし、近くの日向隼人、諸県君などの軍が、主戦場の国分平野の戦いに馳せ参じたのではないかと思います。大隅と日向の隼人が共に戦う一体感を持てたのは、愛する聖なる山、高千穂・霧島の峰を仰ぐ土地にお互い住んでいるという親近感があったからではないかとも考えます。

今度の鹿児島、宮崎両県の五市二町のジオパーク認定を目指す連携は、隼人の乱の曽国首長連合ならぬ、平和的な自然・文化保護連合といえます。

霧島高千穂の「宝の山」を保全し、活用する活動とPRを今いっそう進め、世界の自然公園（ジオパーク）として霧島が認められたら、どんなにすばらしいことでしょう。

（文責：藤）